

ゲンビどこでも企画公募 2013 展 (審査結果・展覧会開催)
2013年11月2日(土)～11月24日(日)

主催：広島市現代美術館

協力：オタフクソース株式会社、オリエンタルホテル広島、広島アンデルセン

今年も多数の作品プランが届きました！最終審査結果、発表！

「ゲンビどこでも企画公募」は、広島市現代美術館のパブリックスペースを発表の機会を求めているアーティストに開放して開催するオープン・プログラムです。広く作品のアイデアを公募し、審査を経て入選した作品を展示します。アーティストの意欲的な表現をサポートし、発表の場を提供するとともに、美術館という場の新しい魅力を発信することを目的としています。

第7回目の開催となった今年も多数の応募をいただき、特別審査員、広島市現代美術館スタッフ等による審査の結果、8点の入選作品を決定しました。

審査の重要なポイントは、美術館の様々なスペースの特徴を活かした作品で、空間と作品の魅力を互いに引き出しあっていること。展覧会をぜひご期待ください。

特別審査員賞 3点を含む、計 8 点の入選作品

【応募総数】148 件

【入選】8 件 (特別審査員賞 3 件、地元協力企業賞 1 件含む)

※特別審査員：岡部あおみ (美術評論家、キュレーター)、椿昇 (アーティスト、京都造形芸術大学教授)、橋本麻里 (ライター、編集者)

【審査の流れ】美術館学芸員による一次審査を行った後、特別審査員等を交えて二次審査を行い、特別審査員賞等ならびに入選作品を決定。

※最新情報から企画詳細まで！特設サイトでご紹介しています。

<http://www.hiroshima-moca.jp/dokodemo/>

「観客賞」そして「授賞式」「地元協力企業の日」など、作品鑑賞だけにとどまらない楽しみ方があります

【展覧会 会期】2013年11月2日(土)～11月24日(日)

【開館時間】10:00-17:00 ※入場は閉館 30 分前まで

【休館日】月曜日 ※ただし祝休日に当たる場合は開館し、翌平日休館

※観覧無料

<授賞式&スペシャルトーク>

2013年11月2日(土) 14:00～授賞式 15:00～椿昇スペシャルトーク
 入選者への賞状及び金一封、地元協力企業からの副賞贈呈。参加者には地元協力企業の提供による食を楽しむスペースをご用意しています。授賞式終了後、特別審査員・椿昇によるスペシャルトークも開催します！※いずれも参加無料

<地元協力企業の日>

・2013年11月3日(日・祝) / 広島アンデルセンの日 (石窯食パン)
 ・2013年11月10日(日) / オタフクソースの日 (広島お好み焼こだわりセット)
 当日、観客賞に投票くださった方 (先着 50 名) にプレゼントをお渡しします。

<観客賞>

来場者による投票で入選作品の中から観客賞 (1 名/組) を決定します。

投票期間：11月2日(土)～11月17日(日)

※11月19日(火) 結果発表 (特設サイト)



- ・アーティストの育成
- ・美術館の新たな魅力を発信
- ・創造の場、交流の場をつくる

<地元協力企業の日>
 当日観客賞へ投票した先着 50 名にプレゼント！
 ● 11月3日(日・祝) / 広島アンデルセン
 11月10日(日) / オタフクソースの日

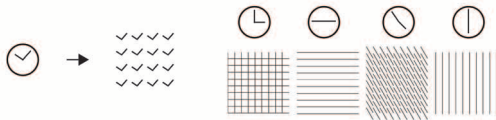


- (左) オタフクソース株式会社
「広島お好み焼こだわりセット」
- (右) 広島アンデルセン
「石窯食パン」

【特別審査員賞（3作品）、地元協力企業賞（1作品）】

岡部あおみ賞

中川洋輔+藤原直矢 /-er (なかがわ・ようすけ+ふじわら・なおや /
イーアール) 《TIME#02》



2012年結成。(中川洋輔：1989年奈良県生まれ、藤原直矢：1989年兵庫県生まれ。) 縦横に並んだたくさんの時計の長針と短針が線を生みだす。見る時々で形をかえるその線描によって、時間という形のないものを可視化する。

橋本麻里賞

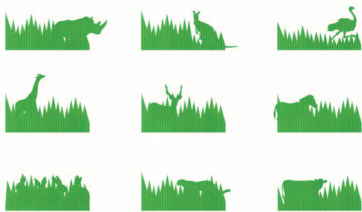
山本優美 (やまもと・まさみ) 《存在の感触》



1983年大阪府生まれ、石川県在住。使い古された衣類や日用品を粘土で精密に再現した彫刻作品を手がける。人の手によって使われた、その痕跡を粘土という固体の物質に記憶させる。

【入選（4作品）】

國本翼 (くにもと・つばさ) 《BARanimal》



1988年広島県生まれ、東京都在住。弁当箱の中の食材を分けたり、彩りとして使われる「バラ」。見慣れたバラから動物を切り出し、つなげることで、観客の足下

にミニチュアの草原を作り出す。

立原真理子 (たちばら・まりこ) 《戸とそと》

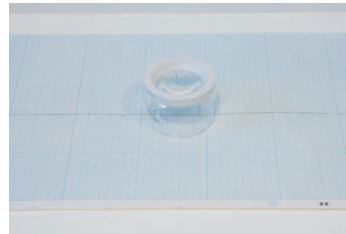


1982年茨城県生まれ、東京都在住。戸として内と外を隔てる一方で、風を通し、内部と外部を透過させる網戸を支持体に、何気ない景色を刺繍によって描いたインスタレーション。それぞ

れの絵や周囲の様子が重なり合い、見る位置によって違った表情をみせる。

椿昇賞

渡辺一杉 (わたなべ・ひとすぎ) 《地球と月の輪郭（原寸大）》



1977年滋賀県生まれ、大阪府在住。宇宙から見た地球と、地球から見た月の輪郭を実寸の描線によって提示するインスタレーション。わずかなカーブによって示された地球と月の姿は

普段あまり意識することのない宇宙と観客自身との関係を問い直す。

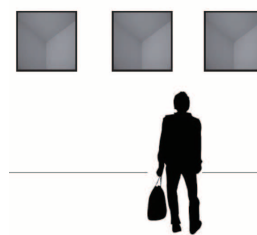
オリエンタルホテル広島賞

yukaotani(ユカオタニ) 《Sweet Vessels》



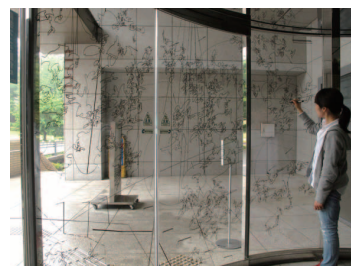
1978年東京都生まれ。一見ガラス製に見える色とりどりのグラス細工によって出来ているそれらは、展示期間中、徐々に溶け出し自壊していく。オブジェクトが時間によって形を変えていく様子を捉える。

佐々木類 (ささき・るい) 《Hidden Space》



1984年高知県生まれ、富山県在住。普段は意識されず、吹きだまりになったり、物などを置かれて隠されてしまうことも多い建築物の「隅」に注目し、美術館内の全ての隅を調査・撮影し、提示する。

文谷有佳里 (ぶんや・ゆかり) 《なにもない風景を眺める》



1985年岡山県生まれ、愛知県在住。ガラス窓に即興でドローイングを行う。具体的なモチーフではなく、作家の直感によって描かれる様々な線が、見慣れた風景に変化を与える。

審査を終えて～特別審査員による審査講評

岡部あおみ（おかべ・あおみ）／美術評論家、キュレーター

実力派の多くの作家の応募があった。審査員賞に選出した中川洋輔＋藤原直矢 /-er の時計の針による痛快な幾何学作品は、広島という時間の推移に敏感な土地で魅惑的な別の力学を提示するに違いない。同様に山本優美氏の見事な陶による下着や日用品のインスタレーションも広島での展示で従来の展開により一層深度を増すだろう。またお弁当を飾る見慣れたバランを本物の草原に見立てた國本翼氏の切り絵は、日常の風景を一変させるウィットに富んでいて感銘を受けた。非常に興味深いプロポーザルでも作家に聞いてみたい要素を残すものがある。たとえば砂糖や水飴を用いる yukaotani 氏はなぜワイングラスに拘るのか、建築の隅を撮影する佐々木類氏の場合、美術館だと均一な画像に収まってしまうのか、リズムカルなドローイングで応募した文谷有佳里氏は本来の音楽的素養を運動させる作品を手掛けないのか、などだ。震災以後の日本の変化は広島に新たな視線をもたらしている。社会変動への細やかな認識をもとに、参加した方々のさらなる展開を期待したい。

椿昇（つばき・のぼる）／アーティスト、京都造形芸術大学教授

今回の審査に当たって基準としたのが、表現者として「私から私たちへ」という姿勢を持っているかどうかという点に絞りました。理由は311以後地球環境と人間の生きる未来に明らかに新しいフェーズが追加されたからです。ただし、その問題に対してジャーナリスト的に表現するのではなく、あくまでも思考を促す装置として依然として有効であるはずの現代美術（？）という条件を敢えて保持した上で、ポエティックに他者に深い思索の契機を与えるものとして存在させようとしたかということです。よって美術というパラダイムから一歩でも出ようともかく表現なのか、「すでにあるかどうかか自明ではなくなっている美術」という藪のなかに相変わらず浸っているのかを問いかけてみました。

そのような視点から選考された30人の作家のポートフォリオとプレゼンテーションを拝見し、10人の方に好印象を持ちました。それらの作品はすでに安定したアウトプットを持っており、いずれの方も将来有望であるとの認識です。もしキュレーションしてグループショーを企画するなら、手堅くまとめることが出来そうだという基準です。しかしながらすでにどこにあった、もしくは手堅いのだが静かな衝撃が伝わって来ないという残酷な観客の身勝手な視点を引用するなら、決定的な支持を与えにくいという段階にあるとも言えるのです。

そこで私が支持を表明したのが渡辺一杉さんの《地球と目の輪郭（原寸大）》という作品でした。この作品はまず異常なまでにシンプルな要素で成立しながら、個人が自然科学に立ち向かったエジプトやギリシャの人々の営為を彷彿とさせる何かがあることなっています。数十億年かけて太陽から容赦無く降り注ぐ放射線をブロックする大気や磁気によって、ようやく生命を誕生させ、その結果として70億以上のホモ・サピエンスを育んだ（？）この惑星は、彼らが発明した欲望の装置によって、数十億年かけて除去した放射線を、人類史や美術史ではなく宇宙史レベルで、北太平洋一面に流出させ続けるという結果をもたらしました。

彼の素朴でシンプルでありながら、天体の輪郭に愚直に迫る姿勢には、天然資源を食い尽くしこの惑星を消費し尽くそうとする止めがたい宿命に、個人がペン1本でどこまで肉薄できるのかという残酷な宿命の詩的解釈を感じたのです。人間の力ではどうしようも無くなったこの惑星に、ドンキホーテのように黙々と一切の電気をいれることなく線を引く彼の仕事に、月光がゆっくり影を移す夜の窓辺から静かな賞賛を送りたいと思います。

橋本麻里（はしもと・まり）／ライター、編集者

驚きや発見を、観客がストレートに共有できる応募作に高い評価が集まったように思う。中でも、國本翼氏による《BARanimal》は、「バラン」を切り抜いて動物と草原を表現するアイデアが、非常にクリアで魅力的。共に非結晶質であるガラスと飴を置き換えた、yukaotani 氏《Sweet Vessels》の、感情をかき立てる強度も注目に値した。

審査員賞には山本優美氏の《存在の感触》を選んだ。氏の作品は、キャミソールや靴下など、多くの人にとってなじみ深い、そして容易に汚れ、ほつれ、塵に戻っていく日常の衣類＝記憶のかたちを、それ以上化学的に変質することのない、物質として極めてスタティックな「焼き物」で精巧にかたどったもので、異化効果のパンチが身体の深いところまで届く。

「事例をコレクション」する段階に留まっている応募作には、そこから飛躍するためにどうすればいいか、再考してほしい。またパフォーマンス、映像系の応募作に、説得力あるものが少なかったのは残念だった。



パリ・ボンビドゥーセンターの初期写真コレクション研究に携わった後、1999-2011年にかけ武蔵野美術大学教授を務め、アートと社会を結びつけるための実践的な講義や活動を行う。現在、資生堂ギャラリートアドバイザー。



ベネチア・ビエンナーレ、横浜トリエンナーレなど、美術と社会の関係を考察する衝撃的な作品を発表し続け、日本の現代美術を代表する作家の一人として世界的に注目を集めている。

★11月2日（土）15:00～
椿昇スペシャルトーク開催！



出版社に勤務した後、日本美術を主な領域とするライター、編集者となる。多数の雑誌記事の執筆・連載のほか、高校美術教科書の編集・執筆も手がける。

広島市現代美術館（学芸担当：山下 広報担当：後藤、鈴木）

〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園 1-1

TEL/ 082-264-1121(掲載用)・082-264-1146(学芸直通)

FAX/ 082-264-1198

E-MAIL/ hcmca@hcmca.cf.city.hiroshima.jp



Hiroshima MOCA
Hiroshima City Museum of Contemporary Art